

「キム・ワンソプ著『親日派のための弁明』書評」

冷静かつ正統派の朝鮮近代史論

大前 繁雄

国民の幸福をどういう基準で測るかという問題は別にして、朝鮮の人々にとっていわゆる“日帝”の統治下にあった三十六年間は、歴史上最も幸福な時代であったことは確かである。それ以前の李朝圧政下の数百年間、あるいはそれ以後の南北分断から現在の北朝鮮の地獄絵図に至る数十年の歴史を見れば分る通り、朝鮮の歴史は貧困と隷従と戦乱の連続だからである。

しかし従来の朝鮮・韓国人の史観は、決してそういう目で自分達の歴史を見ない。左右、南北を問わず、朝鮮・韓国人の手になる日本の朝鮮統治に関する論述はことごとく反日であり、怨念に満ちたものであった。

例えば私が大学生であった頃、最も良識的といわれた金三奎（キム・サムキュウ）氏の『朝鮮現代史』（昭和三十九年筑摩書房刊）を繙いても、朝鮮戦争や共産主義批判については極めて客観的、公正であるのに対し、日本の朝鮮統治という点になると一変、抑圧、収奪、統制だけを強調する歴史観となる。

「なるほど、アジア的封建社会に近代的土地所有制度を確立し、鉄道を敷設し、港湾を造築し、秃山を緑化し、水利事業を起こし、貿易額をふやしたのは事実であるが、（中略）そういった朝鮮の『近代化』は、要するに日本人が住みよく、搾取しやすくするための『近代化』であって、朝鮮人のための『近代化』ではなかった」（同書一四頁）と述べ、典型的な搾取型植民地論を展開するのである。

キム・ワンソプ氏は、このような通俗的かつありきたりの反日的植民地論を一刀両断のもとに切り捨てている。金三奎氏が“日本のための近代化”と述べたのを、そうではなくまさに“朝鮮のための近代化”であったことを説いたのが、この『親日派のための弁明』である。

「六年以上の教育を受けた人は大韓帝国の末には二・五%にすぎなかったのが、だんだんとふえてゆき、一九三〇年代に生まれた人びとは七八パーセントが小学校以上の教育を、十七パーセントが十二年以上の教育を受けた」（同書一〇二頁）、といった記述をはじめ、経済の安定、人口と生産力の急速な増大等、朝鮮の近代化に理想主義的な熱意を持って取り組んだ日本の姿勢を、高く評価しているのである。

こういった日本の統治を積極的に評価する見解は、既にもう一人の親日派学者呉善花（オ・ソンファ）さんが『生活者の日本統治時代』（平成十二年三交社

刊)でも明らかにされているが、興味深いのは、どう見ても親日派とは分類されない立場の人の著作の中にも、同じような当時の状況が読み取れることである。

たとえば、北朝鮮のトップ女優から金正日に見初められて妻になったソン・ヘリム氏の姉ソン・ヘランさんの最近の著『北朝鮮はるかなり』上・下(平成十三年文藝春秋刊)がそれである。

成憲現(ソン・ヘラン)さんは、この書の中で“苛酷な日帝植民地統治”という言葉をしばしば使っているが、実際にこの本の中に登場する日本人というのは、子供の頃に白菜畑に入って白菜を盗もうとして、こっぴどく叱られたという日本人以外、一人も悪い日本人は登場しない。逆に、極貧ながら勉強のよくなった著者の母親を、何とかして日本内地の学費の要らない学校に進学させようと骨を折ってくれた日本人教師はじめ、戦前の日本人の美德を体現する人が何人も登場するのである。

そういうことから察すると、植民地時代の半島における日本人、およびその統治は、金完嬰(キム・ワンソプ)氏や呉善花さんの説く通り、全般的には決して抑圧的なものでなかったと結論づけ得るのではなかろうか。

いずれにしてもこの『親日派のための弁明』は、軽薄なアジテーション論文ではなく、極めて冷静かつ正統派の朝鮮近代化史論であり、ともすれば敗戦後遺症で自信喪失に陥りがちな私達日本人にも自信を取り戻させてくれる好著である。

短期間のみごとな日本語訳を完成された荒木さんご夫妻に、心から敬意と感謝を申し上げますとともに、日本の各階層の人に一人でも多く読まれるよう推奨したい。

平成14年9月10日

拓殖大学日本文化研究所発行 「日本文化」寄稿